あれがソーサラー

ミミズ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

あれがソーサラー

【Ｎコード】

Ｎ５５０３Ｚ

【作者名】

ミミズ

【あらすじ】

闇と氷に閉ざされた異世界『オブス』に棲む闇の生命体『ダークライフ』――彼らは光を求めてゲートを開き、人間界へと姿を現す。彼らを見つけて討伐することが、魔法の力『ソーサリー』をきわめたローゼにあたえられた任務だ。

ローゼは街に出現したダークライフをたおすため、真夜中の街を駆け抜ける。巨乳上司のエレインと協力してダークライフをたおしていくが、彼らのリーダーをとり逃がしてしまう。

次の日、寝不足のままソーサリー支援部に向かったローゼのもと

に、かわいい後輩美少女がやってきたが、その子は男が超苦手で――あらすじちょっと堅いですが、文章は基本軽めです　^^；　ストーリーも、魔法とちょいハーレムな感じのラブコメを中心にしていく予定です。

1

本作のメインキャラとなる三人です。今回はカラーに挑戦してみました。（＾・ω・′）
イラストのサイズはＰＣ＆スマフォで閲覧しやすい様に縮小されてるみたいですが、それでも大きめなので携帯電話だと見づらいかもしれません。。

＞ｉ３７３４５―９５１＜

＊ローゼ・シーグムンド（ロゼ）
ソーサリー団体『黎明の光団』に所属するソーサラー。１７歳。
電撃を主とした攻撃系のソーサリーが得意で、魔力もずば抜けて高い。
優秀だがマンガとその他遊びが好きで、性格はのん気で軽め。
クラスはソーサラー・ミドル。

＞ｉ３７３４６―９５１＜

＊ルーサ・イシュメル・ファニ・ジェレマイア（イシュメル）
ローゼの一年下の後輩で、彼が所属するグループ『治安会第十五団』に配属された新人のソーサレス。
有名な貴族の家に生まれたお嬢様で、性格はとてもまじめ。
しかし男性が超苦手で、少し触れただけで気絶してしまう。
クラスはアプレンティス・ミドル。

＞i37347―951＜

＊エレイン・ユーフェミア（エル）
ローゼとイシュメルの上司で、彼らが所属するグループの団長。
おっとりとした女性だが、ローゼのことが大好きで彼にちょっかいを出すことが多い。
ソーサレスとしては非常に優秀で、ステータス系などのソーサリーが得意。またソーサリーツールの扱いにも長ける。
クラスはルーラー・マイナー。

イラストは今後も（時間と気力があれば）追加していく予定です。

1（前書き）

若干エロ入ってますので、苦手な方はご注意ください。（ー ー；）

1

「エル、ダークライフはいた？」

夏の蒸し暑さが残る九月の夜。ローゼは上司のエレインと夜の街を走っていた。薄茶色の古びたビルがならび立つ街道は、戒厳令（かいげんれい）が出ているため鳴りをひそめている。

ローゼは肩にかかる長い髪を頭の後ろで括っている。髪の色は銀色に近いペールブロンドで、肌は白人女性のように白い。身長もすらっと高く、外見はなかなか美男（イケメン）である。

「ダークライフは見つからないけど……」

ローゼはとなりを走るエレインを見やる。彼女は三歳年上の二十歳で、ふわふわとしたブロンドの髪を伸ばしたかわいい女性である。くりくりとした大きな瞳と艶（つや）やかな肌があどけなさを感じさせる。

エレインの服装はキャミソールとミニのフレアスカートで、一見すると上司には見えない。メロンのように大きな胸が、彼女の動きに合わせて上下にはげしく揺れていた。

――す、すげぇ。

爆発的に上下するエレインの胸を見て、ローゼは唾をごくりと呑んだ。

「み、見つからないけど、何？」

「その、お願いだから……走りながらマンガを読むのはやめてくれ

ないかなって」

エレインは困惑の表情を浮かべて苦笑する。ローゼの手もとには単行本『ツーピース（二十八巻）』がにぎられていた。

なおツーピースは、山賊の主人公がお宝を目指して旅をするアドベンチャー系のマンガである。

「いやあ、ごめん。最近任務ばっかで読む時間なかったから」
「うん。それはわかるんだけど。……でも、普通に行儀悪いよ？」
「あはは、そだよねー。でも、気がつくと身体が勝手に動いちゃうんだよね。身体がマンガを欲してるというか、何というか」
「んもう！　いつもマンガ読んでばっかりなんだから、こんなときまで読まなくてもいいでしょ」
「はは、それはそうなんだけど――」

笑ってごまかそうとするローゼにエレインが横から飛びついた。

「あ、ちょっと！　エル、何するの」
「今は仕事中なんだから、ツーピースはあたしがとりあげます！」
「ちょ、ちょと！」

ローゼはマンガ本を持った右手をあげて必死に抵抗するが、左腕からエレインの柔らかい感触がむにゅっと伝わってきて、力がだんだん抜けてしまう。

「あ、やめ」
「ほら、早くわたして！　後でちゃんと返してあげるから」

なかば抱き合うような形でエレインともつれ合い、ローゼの残り

の体力はすぐに尽きてしまった。ローゼの右手からマンガ本があっさりとりあげられる。

「ツーピースの二十八巻は、ダークライフを捕まえるまでおあずけだからね」

「は、はひ……」

マンガ本と体力を失ったかわりに何かを手に入れたローゼだった。

ローゼとエレインは、ソーサリー団体『黎明(れいめい)の光団(ひかりだん)』に所属するソーサラーである。

舞台のグラディス帝国は魔法の力『ソーサリー』が発展した国であり、ソーサリーを習得した魔道師をソーサラーと呼ぶ。

ソーサラーはソーサリー団体に所属し、ソーサリーの研究と社会活動を行う。

ローゼは帝都にあるソーサリーアカデミーを十五歳で卒業して団体に入団した。まだ二年目だが、高い魔力で何体もの敵をたおしてきた凄腕のソーサラーである。

ローゼの主な任務は、帝国の治安部（警察のこと）の補佐となる。治安官とともに現地へ行き、攻撃系のソーサリーで敵を討伐するのである。

ローゼは骨抜きにされてしまった身体に力をこめて起き上がった。

「にしても、こんな夜遅くに街に出てくるなんて、ダークライフは非常識だね。駆り出される身にもなってほしいよ」

「そんなこと言ったって、しょうがないでしょ？　ダークライフは

夜に活動する種族なんだから」

ため息をつくエレインの前でローゼは背中をだらりと丸めた。

「そりゃそうだけどさあ。だって今、夜の十一時だよ？　あと一時間で日付変わっちゃうんだよ？　何でそんな時間にわざわざ出てくるわけ？」

「出てくるわけって、あたしに言われても」

「あーもう、今日は二時までツーピース読んでようと思ってたのに、とんだ邪魔者が入ったもんだ！」

「ツーピースで夜更かしするな！」

エレインは呆れてローゼに叫んだ。

＊　＊　＊

ローゼたちの住む人間界とは違う、第二の世界が存在する。

その世界を『オブス』という。

オブスは日の光があたらない闇と氷に閉ざされた世界で、『ダークライフ』という闇の住人たちが棲んでいる。ダークライフは光を求めてゲートを開き、人間界へと姿をあらわす。

ダークライフは人間界をわが物とするため、頻繁に出現して街を襲う。彼らを見つけ、討伐することがローゼたちに課せられた任務となる。

「ところでエル、今回のダークライフはどんなやつらなの？」

ローゼは街道を走りながらエレインに問う。エレインは揺れる巨乳を腕で押さえながらとなりを走っている。

「治安部の報告によると、彼らは十六体。すべて人型で、司令塔のダークライフは強力なソーサリーをつかうらしいわ」

「うわっ、上位のダークライフとはまた面倒な」

「でもロゼだったら楽勝よ。だって黎明（れいめい）きっての天才ソーサラーなんだから！　だから今日もがんばってねっ☆」

「うわ、超押しつける気まんまん……」

かわいい笑顔を向けるエレインに、ローゼは露骨に嫌そうな顔をした。

ダークライフの容姿は人型からモンスターのようなものまでさまざまである。人型のダークライフは力が低いかわりに高い知能を持ち、ほとんどの者が高度なソーサリーをあつかう。

上位のダークライフは捕まえるのも倒すのも難しい。そう考えただけで気が重くなるローゼだった。

街の大通りをまっすぐに抜けると、対角線状の道が交差する十字路にたどりついた。広い公園のような十字路には、制服を着た治安官とソーサラーたちがたおれている。

「これはひどい」

ローゼが唖然としながらあたりを見わたすと、近くの建物が倒壊していた。まるで大砲で打ち抜かれたように壁に大きな穴が開けら

れ、崩れた石片が路上に散らばっている。

「おや、また新手が来ましたか」

突然の声が上から聞こえて、ローゼとエレインは夜空を見あげた。二階建てのパン屋の屋根の上に、背の低い男が立っていた。

黒い髪を生やした、子供のような男だった。白いシャツの襟（えり）に黒のネクタイを締めて紳士然としているが、ふっくらとした頬が妙な違和感をおぼえさせる。

――こいつか。

彼の身体から、漆黒のアニマ（魂の力）が湯気のように放出されている。ローゼはひと目でわかった。彼が司令塔のダークライフだと――。

2

「はじめまして。私はランシアといいます」

頭を下げたダークライフ――ランシアをローゼがにらみつける。

「あんたかい？　こんな時間に出てきて街を破壊してるダークライフっていうのは」

「ええそうですよ」ランシアがふふとあざ笑う。「光に慣れていない私たちは夜でないと活動できませんからね」

「そうかい。じゃあそろそろ日付も変わっちゃうことたし、おとなしく降参してもらおうかな？」

「できるんですか？　あなたたちに」

ランシアは目を細めてアニマの力を強める。

身がまえるローゼのとなりで、エレインが彼の腕に手をまわした。

「できるわよ！　あたしたちの愛の力にかかれば、あなたなんて瞬殺なんだからね！」

「ちょっと待て。愛の力って何だ――て、うおっ！？　気づいたら腕組まれてるし！」

ローゼが慌てて離れると、エレインは目をうるうるさせた。

「そんな……！　忘れちゃったの？　昨日、あたしに言ってくれたこと」

「き、昨日は、普通に休みだったと思うけど――」

「そうよ！　昨日、ロゼはだれもいない夜の公園にあたしを呼び出

して、言ってくれたじゃない！　これからはいっしょに暮らそうねって」
「言ってない言ってない。ていうか夜の公園って何？　まったく記憶にないんだけど」
「そんな、ひどい……！　あたしをあんなに弄んでおいて、まったく記憶にないなんて。あたしのことはただの遊びだったの！？」
「待て待て待て！　いつからそんな関係になったんだ。俺たちはただの上司と部下だろぉ！」

慌てふためくローゼを見てランシアが声を出して笑った。

「いきなり何をはじめるのかと思えば。みごとな夫婦漫才ですね」
「漫才ではないわ。だって本当の夫婦なんだから」
「だから違うだろおおぉォォォォ！」

ローゼははっとわれに返り、腰を少し落とした。

「おっと、こんなところで三文芝居をしてる場合じゃなかった」
「違ったのですか？」
「あたり前だ！　って、あんたがつっこむなよ、ランシア。やる気なくなるじゃないか」
「ふふっ、ならそのまま帰宅していただいてもけっこうですよ」

パチン、とランシアが右手の指を鳴らす。まわりのビルの陰から、全身を黒の服でつつんだダークライフたちがずらりと姿をあらわした。

「しかしお帰りいただけないというのなら、私はあなたたちを抹殺しなければいけません」

ランシアの号令でダークライフたちが一斉に襲いかかってきた。ある者は剣で、また別の者は凶悪な爪でローゼを斬りつける。

「さあ、私たちを阻害する愚かな人間たちを殺害するのです！」

ローゼは後退してダークライフの剣撃をひょいとかわした。

「仕方ない。……エル、こいつらを殲滅(せんめつ)するぞ！」

「わかったわ！」

くすりと笑うエレインに背を向けて、ローゼは続けて襲いかかってきたダークライフの攻撃をかわす。その周囲をダークライフたちがしつこく包囲してくる。

街灯の近くに逃げたローゼの背後を、大きな影が覆いかぶさった。二メートルを超える巨体のダークライフが腕を大きくふりかぶり、鉄柱のような巨大な鉈(なた)をたたきつける。

「ち！」

ローゼは鉈をかわしながらダークライフの背後にまわりこむ。同時に心の中で魔法語をとなえた。

ローゼのアニマが電気を具現化し、懐(ふところ)に引いた両手からばちばちと青白い火花が放たれる。

ローゼは両手を突き出し、掌(てのひら)で形成された光の玉を押しつけた。

「電撃(メガボルト)！」

光の玉がダークライフの背中で炸裂し、紫電を八方に放出させる。

ダークライフは身を焦がしながら吹き飛び、向こうのビルの壁に激突した。

＊　＊　＊

ソーサリーは、想い描いたイメージを具現化する能力である。

ソーサラーは具現化する力を想念し、同時に魔法語と呼ばれる具現化の手順を記した言葉を心の中でとなえる。

精神の中にあるとされる魔力がイメージと魔法語を読みとり、体内のアニマ（魂の力）をつかって力を具現化する。

ソーサリーは攻撃を主としたものから、回復系、ステータス系など種類は豊富だが、能力を具現化するプロセスはどれも同じである。

ローゼは電撃（メガボルト）でダークライフたちを吹き飛ばしていく。十体以上もいたダークライフたちが次々とたおれていく。

「エル、そっちはどう――」

後ろにいるエレインにふり向いた瞬間、ひも状の鞭（むち）の先端が恐ろしい速さで迫ってきた。ローゼは「ひいいぃぃ！」と悲鳴をあげて鞭をよけた。

「おほほほほ！　あたしを女王様とお呼び！」

エレインは具現化した鞭を高笑いしながらふりまわしていた。

「な、何やってんの？」
「何ってＳＭプレイだけど？」
「いや、それはわかるんだけど。……なぜこのタイミングでＳＭを？」
「だって、前から一度やってみたかったんだもんー」

エレインは頬に手をあててうっとりする。彼女のまわりでは四体のダークライフがうずくまり、苦しそうにうめき声をあげている。

――何気に効いてるし。

げんなりするローゼをエレインがとろんとした目で見つめる。

「もしかしてロゼも虐めてほしいの？」
「えっ――」

ぼけっとするローゼの足に鞭が高速でふりおろされる。ばちん！というかわいた音と「あいたあああぁぁぁ！」という悲鳴が夜空にひびきわたる。

「ほらほらぁ、早く逃げないとロゼも女王様の奴隷になっちゃうわよぉ」
「ば、ばか！　やめろ！　こんなところでふざける――あいたあああああい！」
「あら、女王様に向かってばかだなんて、何て無礼な奴隷なのかし――は！」

正気に戻ったのか、エレインは急に追うのをやめて具現化した鞭を消失させた。

「あ、そうだ！」
「いたた、やっと正気に戻ったか」
「ロゼはＳＭよりもブルマの方が好きなんだよね～」
「だあっ、いらんこと言うなあああぁ！」

絶叫するローゼの背後にランシアがまわりこむ。とっさに後退するローゼとエレインの前で、ランシアは「長剣（ソード）」とソーサリー名をつぶやいた。

ランシアが具現化した剣でローゼに斬りかかる。ローゼも腰に差した剣をすばやく抜き放ち、ランシアの剣を手荒く弾いた。

「すばらしいですね。間抜けな漫才コンビのようですが、今まで相手してきたどのソーサラーよりもあなたたちは強い」
「そいつはどーも！」

ローゼは右足を踏みこんでランシアに斬りかかる。白銀の剣閃が夜空を裂き、ランシアの持つ白刃と火花を散らす。

「しかし」
「しかし、何だ？　いい加減にあきらめて降参する気になったか？」

不敵な笑みを浮かべるローゼを見て、ランシアが「ぷ」と口もとをおさえた。

「まさかブルマフェチだったとは」
「な……！」

ローゼの顔が林檎のように赤くなった。

「い、いいじゃんか！　趣味は人それぞれなんだからよぉ！」
「私は別に悪いと言ってませんよ？　ただ、意外だったなあと思っただけですから。……しかしブルマとはまたマニアックな……ぷぷっ」
「お前何でブルマとか知ってんだよ……」

ぐぬぬと狼狽するローゼの前でランシアは後ろに高く跳躍する。空中でくるりと一回転して屋根の上に降り立った。

「茶番はこの辺で終わりにしましょう。私はそろそろ撤退させてもらいますよ」
「あっ、待て！」

ランシアは嘲弄（ちょうろう）してとなりの屋根に飛びうつる。その後をローゼとエレインが追いかける。

「彼を放置したら街の被害が拡大するわ。……ロゼ！　今日中に彼を捕まえるわよ！」
「お、おう」

巨乳をゆらしながら走るエレインの後にローゼはつづく。

――にしても、また面倒なやつが現われたもんだな。

エレインの胸をちらりと見やりながらローゼは思った。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5503z/

あれがソーサラー

2011年12月20日00時51分発行